

(第1号様式)

プロジェクト登録申請書兼 J ブルークレジット[®] (試行) 認証申請書

令和4年 9月30日

ジャパンブルーエコノミー技術研究組合 御中

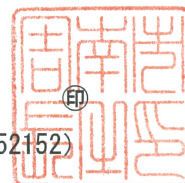
(代表申請者)

住所 山口県周南市岐山通 1-1

周 南 市

氏名 周南市長 藤井 律子

法人番号 (4000020352152)



(申請者)

住所 山口県周南市築港町 11-17

山口県漁業協同組合 周南統括支店

氏名 支店長 藤村 和義

法人番号 (4250005004158)

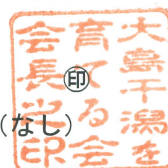


住所 山口県周南市大字大島 910-1 (山口様方)

大島干潟を育てる会

氏名 会 長 永濱 一臣

法人番号 (なし)

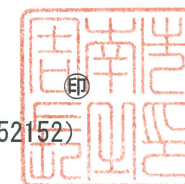


住所 山口県周南市岐山通 1-1

周 南 市

氏名 周南市長 藤井 律子

法人番号 (4000020352152)



(法人又は団体の場合には、名称及び代表者の氏名)

法人番号 (法人番号の付与を受けている場合には、13桁の半角数字)

J ブルークレジット制度実施要領の規定に基づき、次のとおりプロジェクト登録兼クレジットの認証を申請します。

プロジェクト番号	☐ 新規申請 ■登録番号 (202112JBCA00002)
プロジェクトの名称	大島干潟から、つながる周南市ブルーカーボンプロジェクト in 徳山下松港

プロジェクト実施者・場所	【実施者】 山口県漁業協同組合周南統括支店 大島干潟を育てる会 周南市 【場所】徳山下松港大島干潟
プロジェクト区分 (複数選択可)	☐自然基盤 ☒人工基盤 ☒吸収源の新たな創出 ☒吸収源の回復、維持、劣化抑制 ☐水産養殖含む ☒水産養殖は含まない
プロジェクト概要	大島干潟は、徳山下松港で発生した浚渫土砂を活用して国が平成 15～平成 29 年度に整備され、その後地元周南市が管理する約 29ha の人工干潟である。 大島干潟では、干潟造成によりアマモ場等の生育環境が整備されたことに加えて、月 1～2 回の定期的な保全活動等に取り組んだ結果、アマモ場、コアマモ場といったブルーカーボン生態系の維持・拡大によって、生物多様性の向上や CO2 吸収源拡大による地球温暖化の抑制に貢献している。 大島干潟における干潟保全活動の経緯は以下のとおりである。 平成 29 年 11 月、山口県漁業協同組合周南統括支店（以下、漁協）に所属する漁業者と大島地区住民の参加・協働により貴重な地域資源である干潟を活用した地域の活性化を目指して「大島干潟を育てる会」（以下、育てる会）を設立し、大島干潟の保全活動を開始した。 漁協は、漁業権が設定されている干潟を含む海域での活動について、同年支店組合員会議に諮り許可するとともに、育てる会が行うアサリ資源の増殖・保全活動に対して放流用のアサリ稚貝の提供、モニタリング時の傭船、活動への助言・協力をしている。さらに平成 30 年度からナマコ桁網によるアマモの刈り取りが行われないように一部を禁漁区にする等してアマモ場の保全を行っている。 育てる会は、アサリ資源の保全や増殖活動、同干潟内のアマモ場・コアマモ場の保全のほか、国・周南市が連携して毎年実施する環境学習活動の支援を行っている。 周南市は、干潟の管理者として育てる会の活動を支援

		し、平成 30 年度に資材等（被覆網、熊手、ビブス、倉庫）の提供や活動会員用の駐車場（借地）の確保及びオブザーバーとして毎月の会の保全活動に参加しているほか、ドローンや船舶によるアマモ場やコアマモ場のモニタリングを実施している。さらに、令和 4 年度からブルーカーボン推進事業を立ち上げ、大島干潟を含む周南市エリアでのブルーカーボン拡大のためアマモの花枝採取を実施、播種等を予定している。 これら 3 者が連携協働して実施している大島干潟での活動は、今後も継続的に活動していくことによりブルーカーボン生態系の維持及び拡大を図り、気候変動緩和の一助として貢献が期待される。 一方で、大島干潟におけるブルーカーボンを拡大・維持していくためには、ドローンや船舶でのモニタリング調査、環境学習の一環としての播種作業（花枝採取や種子選別等）等を継続して行っていく必要があり、そのための予算の確保が重要である。 J ブルークレジットによって得られた資金については、上記の大島干潟のブルーカーボンを拡大・維持するための活動資金として活用していく予定である。
		【申請対象期間に実施したプロジェクト概要】 定期的な保全活動を月 1～2 回継続実施し、主な活動内容はアサリを食害から守る被覆網のメンテナンス、アサリの間引き、アサリ種苗からの中間育成試験、カキの養殖試験、干潟清掃活動などがアマモ場やコアマモ場の維持・増大に努めた。また、保全活動に加え、小学生を対象とした環境学習会として、アサリやカキの育成勉強会や干潟の生き物観察会を計 5 回実施した。
プロジェクト実施期間		平成 29 年度～現在
クレジットの認証申請対象期間		令和 3 年 10 月 6 日～令和 4 年 10 月 5 日
方法論	① 対象生態系面積の算定方法※	【対象とする生態系】 ■海草 ■海藻 □マングローブ □干潟 アマモ場、コアマモ場、ガラモ場（ホンダワラ科アカモク、ウミトラノオ等） ※別添 1 のとおり

	② 吸収係数	1. アマモ 桑江ら(2019)の表-4に記載されているアマモ場の吸収係数(4.9 t-CO₂/ha/年)を用いる。 2. コアマモ 桑江ら(2019)の表-4に記載されているアマモ場の吸収係数(4.9 t-CO₂/ha/年)を準用する。 3. ガラム 桑江ら(2019)の表-4に記載されているガラム場の吸収係数(2.7t-CO₂/ha/年)を用いる。
	③ 吸収量算定方法	【算定した式】 面積×吸収係数 【算定結果(吸収量)】 1) 人工干潟のアマモ・コアマモ場(実勢面積) アマモ場 : 5.61 ha×4.9 t-CO₂/ha/年= 27.48 t-CO₂ コアマモ場 : 2.94 ha×4.9 t-CO₂/ha/年= 14.40 t-CO₂ 2) 潜堤部のガラム場(被度3以上の面積) ガラム場 : 0.051 ha×2.7 t-CO₂/ha/年= 0.13 t-CO₂ 3) 周辺部(沖山地区)のアマモ場(被度3以上の面積) アマモ場 : 0.36 ha×4.9 t-CO₂/ha/年= 1.76 t-CO₂
	④ 確実性評価	【面積の確実性】 1) 人工干潟のアマモ・コアマモ場 空中ドローンによる空撮及びGPS付魚探で岸沖ライン調査を行い、アマモ場の分布範囲を確認した。また、岸側のコアマモ場については、空中ドローンにより分布範囲を確認した。これらの画像により判読がなされていると判断した。GPS付魚探による観測と空中ドローンによる観測を行い、スポット的に水中カメラ等により被度の判別を行っていることから確実性は95%とした。 2) 潜堤部のガラム場 空中ドローンにより面的な範囲を確認するとともに、徒歩により潜堤部のガラム場を目視で観察し、構成種を判別し、潜堤から0.5~1m程度の幅で分布していることを確認した。空中ドローンによる観測と徒歩による目視観察を行っていることから、確実性は90%とした。 3) 周辺部のアマモ場 目視観察により分布範囲をスポット調査で把握し、水中

		カメラによる被度を確認したことから、確実性は 85%とした。 【吸収係数】 1) 人工干潟のアマモ・コアマモ場 吸収係数は、80%とした。 2) 潜堤部のガラモ場 吸収係数は、40%とした。 3) 周辺部のアマモ場 吸収係数は、40%とした。
	⑤ 調査時に使用した船舶の情報	【船舶情報】 ・ 台数：船外機船 (0.9 トン 15PS) 1 台 ・ 出力：15PS ・ 稼働時間：4 時間 ・ 燃料の種類：ガソリン 【船舶による CO2 排出量】 ・ CO2 排出量：$4 \text{ h} \times 11 \text{ kW} \times 0.209 \text{ l/kWh} \times 1/1000 \times 2.32 \text{ t-CO}_2/\text{kl} = 0.02$
ベースラインの設定方法・妥当性とその量		1) 人工干潟のアマモ・コアマモ場 大島干潟造成前をベースラインとして設定する。干潟造成前は、地元漁業者により現地においてアマモ、コアマモの生育繁茂は確認されていないため、ベースラインをゼロとする。 2) 潜堤部のガラモ場 大島干潟造成前をベースラインとして設定する。干潟造成によって潜堤が設置されたことから、ベースラインをゼロとする。 3) 周辺部のアマモ場 沖山地区では、元々アマモが分布していたが、平成 1～4 年度ごろには消滅したとされている（環境庁 第 4 回及び 5 回自然環境保全基礎調査）ことから、ベースラインはゼロとする（別添 1）。
クレジット認証対象の吸収量		1) 人工干潟のアマモ・コアマモ場 アマモ場：$5.61 \text{ ha} \times 95\% \times 4.9 \text{ t-CO}_2/\text{ha}/\text{年} \times 80\%$

	$= 20.89 \text{ t-CO}_2$ コアモ場 : $2.94 \text{ ha} \times 95\% \times 4.9 \text{ t-CO}_2/\text{ha}/\text{年} \times 80\%$ $= 10.94 \text{ t-CO}_2$ 2) 潜堤部のガラモ場 ガラモ場 : $0.051 \text{ ha} \times 90\% \times 2.7 \text{ t-CO}_2/\text{ha}/\text{年} \times 40\%$ $= 0.04 \text{ t-CO}_2$ 3) 周辺部のアマモ場 アマモ場 : $0.36 \text{ ha} \times 85\% \times 4.9 \text{ t-CO}_2/\text{ha}/\text{年} \times 40\%$ $= 0.59 \text{ t-CO}_2$ ここで、1) ~3) の CO₂ 吸収量合計 : 32.46 t-CO₂ から プロジェクト実施に伴う排出量 : 0.02 を控除した後の 吸収量は、以下のとおりである。 <u>32.4 t-CO₂</u>
--	--